

# パブリックコメント

市川浩

先日十年に一度の學習指導要領改訂案の公表ありて、博くパブリックコメントを募集す。今回は歴史教育に於ける用語の使用に就き、歴史學に於ける取扱に準ずべくその手始めとして、歴史的人名、名稱は關聯する事象當時のものを使用するとて、聖徳太子は薨去後の名なれば、廢戶皇子と表記する他、大和朝廷の名は後世の命名故、これを大和政權とするなど、餘り反論もなからむ例を擧げ、定著を待ちて全面的に歴史學的取扱に移行せむとす。

少し考ふれば、人名に關しては歷代天皇の諡は全て崩御の後なれば、忽ち問題生ぜむ。また前の大戦當時支那事變、大東亞戦争と稱したるは紛れもなき事實なるも、かゝる呼稱を敢て使用するの勇あらむや。果してパブリックコメントは此の改稱を問題視し、其の數亦多かりけむ、遂に此の試みを撤回するに至れり。之に就き所感二點あり。

第一は吾も同趣旨のパブリックコメントを送附せるも、恐らくは無視せらるゝを覺悟し、せめて文献として残るを望めり。然るに之が撤回となれるは、無論多數のコメントの威力はさらなり、底に英國のEU離脱、米國のトランプ大統領の登場などと同種の潮流を見る。即ちブリュッセルの官僚の指示、ワシントンやニューヨークの知識人の指導等にたゞ従ふのみの生活に知的好奇心や想像力を取戻さむとの情念と同じく、我が國に於ても虎ノ門の委員の建議に無意識に従ひ來たれることへの疑念生じたるにあらずや。

第二は今回更に多數のコメントありけむ小學校に於ける英語の義務教育化は特段の變更もなかりけり。歴史事象の名稱問題との差は如何にと考ふるに、未<sup>いまだしからず</sup>然と已<sup>すでにしかり</sup>然との差ならずや。即ち一旦動き出せる制度・施策は變更し難し。

茲に於て想起するは假名遣の改定なり。敗戦後の現代假名遣の制定までは明治三十三年のいはゆる棒引き假名遣の採用や大正十三年の假名遣改定など文部省の施策を始め、各種の假名遣改定論は何れも頓挫す。無論森鷗外、山田孝雄等一流文化人の假名遣改定反對の論與りて力ありとするも、同時に當時は歴史的假名遣が「已然」とて儼存し、改定論は「未然」たり。然るに占領軍の後盾も見え隠るめる「現代かなづかい」成立するや、これが「已然」となりぬ。その後の表音式假名遣擁護の言論に殆ど見るべきものあらず、一方正統表記派による「現代かなづかい」批判は戦前の假名遣改定反對論に比すとも、遙かに合理的、論理的なるにも拘らず、昭和六十一年の「現代假名遣い」にて一部強制に齒止め掛りしも、「未然」に留められける歴史的假名遣は遂に復活成らざりけり。

翻り、歴史的事象の名稱改定は「未然」たるが故にパブリックコメントにて廢案となり、小學校の英語は「已然」となりたるが故にパブリックコメント及ばざりけりところ言ふべけれ。思へば「普遍的文化的創造」を六十年間「已然」とて掲げける教育基本法の改正は、底に文化の世界<sup>グローバル</sup>一極主義<sup>バリズム</sup>より多様性の尊重への流れありと雖も、正に奇跡ともいふべし。十年を経て漸く「古典の世界」「古典」に非ずるに親しむ施策出で始むるも、現代文との表記の二種併存、必ずや一元化を求むべし。古典表記は現状歴史的假名遣が「已然」なり、焉んぞ安易に「現代假名遣い」に書き換ふべけむや。

(平成二十九年六月二十八日受附)